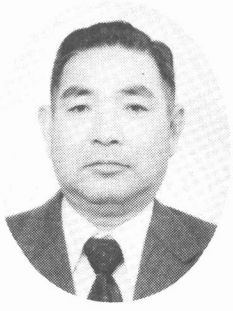
巻頭言



ディスコにのる教師

―― 相談的なアプローチ ――

教育相談部　横　内　直　典

当教育センターの教育相談講座に参加される先生方は、講座要項等によって、一応は、内容を承知してのうえとはいえ、それでも、なお、期待と不安を持って参加されているのが、大部分であろうと思います。そして、実際、入室すると、ディスコ音楽が流されているので、研修の場には、なじまないものを感じられるようで、一瞬、とまどわれる先生方が多く見うけられます。

続いて、簡単なウォーミングアップ。そして、軽快なディスコのリズムに合わせてのダンス。これが講座のイントロとなります。この時になってくると、先生方の動きに、明らかに相違が見られるようになってきます。その第1は、ダンスに熱中してくる人であり、第2は、一応そつなくやっている人、そして最後は、できるだけダンスの輪から離れ、傍観的な立場をとろうとする人と、大きく3つのグループに分かれてしまいます。

ところで、私たち教師は、目の前の子供を「わかる」にしても、二通りのわかり方があるように思います。そのひとつは、教師が、自分の既存の固定した「子供像」に照らし合わせて、それでわかったとする「わかり方」と、もうひとつは、教師の前にある子供の独自なあり方、独特な生きた体験に心を開いて、その、ありのままをとらえることによって、わかる「わかり方」であろうと思います。

おそらく、ダンスを傍観的な立場にたってやり過ごそうとする人の「わかり方」は、前者の「わかり方」に陥ってしまうに違いありません。このことは、ありのままの自分を、素直に表現することへの抵抗が、他人の素直な表出をも拒む結果、そうなるのだと思います。

林竹二前宮城教育大学長は、「　学校教育における子供の不幸の根本は、子供が感受性のかたまりというべき存在であるのに対して、これを教える教師が、考えようもないくらいに、感受性を欠いている事実の中にある。」といっています。また、このことは、「教師」の代りに、「親」の文字を置換えても成り立つように思います。教師や親は、自分が、小さい頃、「素直でいい子だった。」、「頭がよくてほめられた。」という経験などから、時として、無意識のうちに、子供の「姿」を固定化し、かえって、人間的なものへのアプローチ――知・情・意の調和のとれた発達――への配慮を忘れているような場合も少なくないと思います。

実は、このことが、教育相談的立場から考えれば、大いに問題になるところです。教師(親)が、子供の次元まで歩み寄り、子供が何を考えているのかを、感じとる努力なしに、教育相談は成立しないということは、だれもが承知しているところですが、頭でわかることと、からだでわかることということは、必ずしも、同次元とはいえないでしょう。

そこで、教育相談的立場では、「ディスコにのる教師」であることが求められるのだと思います。